

が待ち受けていた。

戦争中の一九四二（昭和十七）年八月、東条英機内閣は専門学校・大学の修業年限六か月短縮を決定したので、四年生は半年繰り上げて九月に卒業することになった。この年から三年間九月卒業が続くことになる。翌四三年になると、学徒の勤労働員が実施され、生徒は軍需工場などで働くかたわら、授業を受けることになった。同年十月には理工科・教員養成以外の学生の徴兵猶予停止が決定され、十二月には徴兵延期廃止による学徒動員（いわゆる学徒出陣）が開始された。同時に徴兵年齢が一年引き下げられ、十九歳となった。文科系である外語生は当然に徴兵猶予の特典は受けられなくなり、年齢が来れば兵役に就く事態となった。

三 東京外事専門学校時代

1 戦争末期 一九四四―一九四五年

一九四四（昭和十九）年四月、東京外国語学校は東京外事専門学校に改組された。この時期、文科・商科系の高等教育機関は無用なものとされて風当たりが強く、全国的にその改組・改称が当局から求められていた。旧姉妹校である東京商科大学も同年、東京産業大学と改称した。本学では今回も学内で校名改称に反対の声があつたようだが、戦時下の「空気」に逆らうことはできなかった。前年から中等学校の英語の時間が削減され、戦時下に外国語を学んでいるということ自体、白眼視される雰囲気があつた。大阪外語も同時に大阪外専となった。改称と同時に専門学校としては例外的に四年であつた修業年限は三年に短縮され、四科の専攻別もなくなった。本科は東洋語を中心とする第



高橋正武

一部（支那、蒙古、タイなど九科）と西洋語の第二部（ドイツ、フランス、ロシアなど五科）に分かれたが、西語部は西洋語であるにもかかわらず葡語部とともに第一部に含まれ、それぞれイスパニヤ科、ポルトガル科と改称した。地域原則に基づく区分別である。教科課程では地理、歴史、民族及び文化の三科目を含む外事という科目が新設された。後に事情と呼ばれる科目に該当する。また、戦時体制を反映して教練、体錬（体操を改称）の時間が非常に増えている。しかし、この年の二月に政府は学徒を通年で勤労働員する方針を決定しており、すでに授業は行えない状況となっていた。五月末、外専は滝野川区西ヶ原町の新築校舎に移転したが、翌四五年四月米軍の空襲により校舎はほとんど焼失してしまった。本学としては実に三度目の校舎喪失であった。戦争中には多数の外語卒業生・生徒・教官が戦場に赴き、祖国のために犠牲となつた者も多い。しかし、その正確な数字は不明であり、学園に慰霊のよすがとなるものは何もない。

2 終戦直後 一九四五—一九四九年

一九四五（昭和二十）年八月、終戦の日は勤労働員先の工場で迎えた生徒も少なくなかった。西ヶ原の校舎焼失後、東京美術学校など三か所に間借りしていた東京外事専門学校は、翌四六年九月に板橋区上石神井の旧東京工業専門学校校附属電波兵器技術専修学校と私立智山中学校の二か所の校舎を借用し、授業を行うことになったが、出席率は非常

に低かった。学生たちは、戦後のインフレと食糧難の中、生活のためアルバイトに精を出しながら学業を続けなければならなかったからである。

苦しい生活状況は教える側も同様である。終戦直後の混乱期には西語部教官の異動が激しかった。一九四五年末、外専の専任教官は笠井鎮夫、高橋正武両教授と外国人教師ムニョスの三人だけであった。この不足を補うため、四六―四七年にかけて大林多吉（大十四卒）、宮城昇（昭十六後卒）、岡田辰雄（昭二十二卒）の三人が教官に採用されたが、大林教授と岡田講師は個人的な事情や病気のため相次いで短期間で辞職している。

永田教授が終戦の年に退官した後、スペイン文学専攻の伝統を受け継ぐべき人は高橋正武教授（一九〇八―一九八四）であったが、一九四七（昭和二十二）年に個人的事情で辞職している。高橋は岡山県出身で一九三一（昭和六）年卒業と同時に講師となつて以来一六年間教職にあつた。学界で活躍するのは、むしろ外語を退職後数年を経て大学教員に復帰してからである。南山大、ついで神戸市外大で教鞭を執るかたわらカルデロン、アラルコン、ペケルなどの作品を翻訳・紹介した。語学分野でも業績があり、とりわけ「スペイン広文典」（白水社、一九五一年、改訂版）【新スペイン広文典】（一九六七年）と「西和辞典」（白水社、一九五八年）は日本のスペイン語学界にとって大きな貢献である。イスパニヤ学会の会長も務めた。

一九四九（昭和二十四）年春、西ヶ原ようやく粗末ながら二階建ての木造校舎が一部完成したが、全学の移転がほぼ完了するのは一九五一（昭和二十六）年三月のことである。一九四九年に新制の東京外国語大学が発足し、外専はこれに包括されることになった。過渡期に当たる四八―五〇年にかけて会田由（昭二卒）、荒井正道（昭一三卒）の両教官が採用され、笠井、宮城とともに戦後の大学の基礎を築くことになる。一九五一年三月に最後の卒業生（外語創立時から数えて第五二期）を出して東京外事専門学校は廃止され、その七年間の歴史を終えた。